再びその人らしい生活に

ふれあいひろば

2017年 秋号 Vol.82

愛仁会リハビリテーション病院
大阪府地域リハビリテーション
地域支援センター

● 住所：高槻市白梅町5番7号
● 電話：072-683-1212
● URL：http://aijinkai.or.jp

1面 わかりやすいリハビリテーション教室【脳卒中編】
2面 第11回日本医療マネジメント学会大阪支部学術集会について ／ チーム医療活動のご紹介② NST回診
3面 地域クリニックとの連携の中で⑰
4面 患者さまだより⑯ ／ 在宅サービスセンターだより

わかりやすい リハビリテーション教室 脳卒中編

地域医療部 医療福祉相談科（退院支援） 主任 中村 利都子

当院では脳卒中を発症された患者さま・ご家族に対して、退院後の在宅生活に向けて、再発予防を目的とした「わかりやすいリハビリテーション教室～脳卒中編～」を毎年開催し、生活面における必要な注意点・配慮点をお伝えさせて頂いています。今年度は、地域住民の方にも是非ご参加頂きたくご案内致します。

脳卒中は、厚生労働省の人口動態統計による死亡原因の第3位となります。人口の高齢化に伴い、特に脳梗塞は年々増加しています。発症すると後遺症のために要支援・要介護状態になる可能性は非常に高く、また、再発リスクも高い疾患です。この教室では、「脳卒中という病気」・「在宅サービス」・「再発の予防」・「日常生活のコツ」等について、動画や実演も交え、それぞれ専門の医師・看護師・薬剤師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・栄養士・医療ソーシャルワーカー・ケアマネジャーが担当し情報提供させていただきます。また、単なる講義だけでなく、患者さま・ご家族からの質問・確認事項を通じ、双方向の学びを得ることが出来る場にしたいと考えております。脳卒中以外の疾患でも、在宅生活を過ごされる中で、不安な事がございましたらご相談ください。

地域住民の方で参加ご希望の方は、下記までご連絡ください。

お問合せ先 愛仁会リハビリテーション病院 地域医療部 わかりやすいリハビリ教室（脳卒中編） 担当者（中村・松本）
TEL.072-683-1212

わかりやすいリハビリ教室（脳卒中編） 研修会開催

この度、脳卒中についての研修会を開催することになりました。
「脳卒中ってどんな病気？」「在宅ではどんなサービスが利用できるの？」等々
在宅での生活に様々な不安をお持ちだと思います。
そんな不安を軽減できるように一緒に学びませんか？

■開催日時：平成29年11月11日～12月9日 毎週土曜日（16時～17時）
■場所：5階デイルーム ■参加方法：自由参加（無料）

	開催日	時間	場所	担当者	内 容
11月	11日（土）	16時～17時	5階デイルーム	ソーシャルワーカー・ケアマネジャー	在宅を支えるサービスについて
	18日（土）			医師	脳卒中ってどんな病気？
	25日（土）			看護師・薬剤師	脳卒中とうまく付き合おう（再発予防）
12月	2日（土）			理学療法士・作業療法士・看護師	日常生活支援のコツ（移乗、更衣、排泄編）
	9日（土）			管理栄養士・言語聴覚士・看護師	日常生活支援のコツ（嚥下：飲み込みについて）

第11回
日本医療マネジメント学会
大阪支部学術集会について

診療情報管理室　室長 越智 敏之

このたび2018年2月24日（土）大阪国際交流センターにおいて、第11回日本医療マネジメント学会大阪支部学術集会（以下、学会）が吉田和也院長を学術集会会長として開催させて頂くこととなりました。

この学会は、1998年にクリティカルパスを中心とした医療マネジメントのノウハウやツールを研究・開発する目的に有志の医療関係者が集まり設立された学会で、各都道府県に支部を配置し支部学術集会を年1回開催されています。例年、医師や看護師、コメディカル、事務職員などの多職種が一同に会し、クリティカルパスや医療連携、医療安全など日々医療の現場における課題の研究や提案を行い、成果を上げています。また、現在の学会会員数は約9,000名で、うち大阪には約800名の学会会員が在籍し全国でも2番目に多い支部となっています。

我が国では、急速な高齢化が進み、近い将来に超高齢社会を迎えようとしている一方で、晩婚化・晩産化により出生率は低下し少子化も確実に進んでいるのが現状です。また、2018年4月には診療報酬と介護報酬の同時改定、医療法の改正などにより今後医療を取り巻く環境にも変化することが予想されることから、第11回大会のテーマは「少子超高齢社会の医療をマネジメントする～医療法改正・診療報酬介護報酬同時改定を見据えて～」と題し学会を開催させて頂きます。多職種かつ多くの皆さまにご参加して頂き、課題の共有と解決へのヒントとなる有意義な場となるよう準備を進めて参ります。

NST回診

栄養管理科 主任
岡本 泰幸

チーム医療活動のご紹介②

NSTは、Nutrition Support Team（栄養サポートチーム）の略語です。

NSTとは、入院患者様に最良の栄養療法を提供する為に、医師・看護師・管理栄養士・薬剤師・言語聴覚士・理学療法士・作業療法士が様々な職種の壁を越えて構成された医療チームの事です。NSTの役割は、入院患者様の栄養状態を評価し、適切な栄養療法を提案・選択・実施することで、栄養状態の改善・治療効果の向上・合併症の予防・QOL（生活の質）の向上する事を活動の目的としています。

当院の理念である「再びその人らしい生活に」向け、リハビリテーション（以下、リハビリ）を行う事ができる栄養状態が非常に大切です。近年、リハビリ栄養と呼ばれる分野が注目され、「栄養ケアなくしてリハ無し」「栄養は、リハビリのバイタルサインである」と言われ、リハビリと栄養には密接な関係があります。

当院のNSTでは、まず管理栄養士と看護師が、栄養スクリーニングを行います。採血での栄養状態、体格（痩せ）、食事摂取量の不足、褥瘡の有無等を確認し、栄養不良のリスクが高い場合、主治医に低栄養のリスクが高い事を提言しNSTへの依頼提案を行います。

NSTの依頼を受けると、医師を筆頭に多職種が定期回診までに対象患者様の情報を収集します。回診当日、回診前に多職種でカンファレンスを行い、リハビリの負荷量・摂取栄養量・今後の方向性を加味した栄養のゴール目標・問題解決の案を話し合います。当院の特徴として、体分析装置（InbodyS10）による骨格筋量の測定を行い、その結果も参考に栄養管理を行っています。体細胞量やむくみの評価が行える為、栄養評価の1つとして役立てています。回診では、カンファレンスの内容に差異が無いか確認し、話し合った内容を主治医に報告・提案を行います。

昨年の実績では77名の御依頼を頂きました。摂取栄養量・血液検査（Alb・TLC）の改善が50名あり、今後も低栄養患者様のリハビリに役に立つNST活動を継続していきたいと思います。

医療法人 正治会 大橋内科

大橋 一院長
大橋 理英副院長

診療科目：内科・消化器科

今回は、当院がお世話になっております大橋内科
【大橋 一院長、大橋 理英副院長】にインタビューさせて頂きました。

Q.クリニックの特徴についてお聞かせください。

A 当院は2006年10月に大橋内科消化器科として開院し、夫婦で診療を行っています。一般的な内科の病気、糖尿病・高血圧病等の生活習慣病や、ピロリ菌の診断・治療、消化器科疾患全般に診ています。内視鏡検査では、胃カメラ・大腸カメラの対応も行っています。訪問診療は10名前後、当院に掛かっておられる患者さまで通院が難しくなってこられた方を中心に実施しております。特に高齢者の方々を中心に診察しておりますが、どうしても患者さんの待ち時間が生じてしまうことが、現状の課題です。

Q.当院の取り組み（短期入院・ボトックス外来・装具外来・心リハ外来）についてはいかがでしょうか？

A 以前リハビリ病院でボトックス注射を対応して頂いた患者さま・ご家族が「（腕が動きやすく）服の着替えがしやすくなった。」と大変喜んでおられました。また、短期入院中に嚥下機能の評価をして頂き、お口からたべられなかったのが、食べられるようになった患者さまもおられましたし、リハビリ病院の役割に感謝しています。

インタビューでは、患者さんの待ち時間についてもお話下さりました。これは診察室で、一人ひとりの患者さまを本当に大切にされているからこそ生じているのではないかと、改めて感じました。また、インタビューはクリニックの休診日に行わせて頂きましたが、大橋院長・副院長始めスタッフの皆さまが、患者さまの待ち時間を減少するための勉強会を実施されており、常に患者さまのことを考えておられるご様子を拝見させて頂きました。

大橋院長・副院長、お忙しい中ありがとうございます。今後ともよろしくお願いいたします。

（地域医療部）

▲大橋 一院長、大橋理英副院長

〒569−1032
高槻市宮之川原1丁目5番26号
TEL.072-687-7881

＊JR高槻駅よりバスで約10分
1番のりば「上の口」行、又は2番のりば「下の口」行で「服部」バス停下車すぐ
大きなオレンジ色の看板が目印です
＊駐車場あり 10台

診療時間		月	火	水	木	金	土
午前	9:00〜12:00	○	○	―	○	○	○
午後	17:00〜19:30	○	○	―	○	○	―

土曜午後は休診となります。
休診日：水曜・日曜・祝日

患者さまだより⑯ インタビュー

山藤知久氏

今回は、現在高槻病院の職員食堂で勤めておられます山藤知久さんにインタビューさせて頂きました。

山藤さんはご自身が44歳であった平成23年に糖尿病を患い、左下腿切断術を余儀なくされました。当院には義足装着での歩行を目的に同年2月に転院、数ヶ月のリハビリテーション入院を経て自宅へ退院されました。

Q. 現在はどのように生活されていますか。

A 高槻病院の職員食堂で調理師補助の仕事を行っています。

Q. 入院中に、退院後の生活について不安はありましたか？

A 仕事については会社の方も『（退院したら）戻っておいでよ』と言ってくれていましたので、そこに不安はありませんでした。ただ、急性期病院に入院し下腿を切断することになり、その時は今後どのように自分の身体がなっていくのだろうという漠然とした不安はありました。今は、義肢のことで困ったら職場から（リハビリ病院が）近いので、近畿義肢さんに相談しています。

Q. 入院中のリハビリテーションはいかがでしたか？

A 『何でこんなに、筋トレばっかりしないといけないの！』って、入院中は思っていました。ただ、退院後はしばらく電車に乗って1時間30分程度掛けて通勤しており、義足で距離を歩く時にもさほど疲れが少なかったので、リハビリ病院での日々のリハビリテーションの効果が出ているなと、退院してから改めて感じました。リハビリ病院にいる間は楽しかったですよ。

お仕事中の合間を縫って、インタビューさせて頂きました。高槻病院、リハビリ病院の職員食堂には職員が日頃大変お世話になっております。インタビューの最後には、「もし、自身と同じような境遇で入院されている方がおられて、何か不安なことで自分ができることがあればしますよ。」と仰って下さりました。本当に心強いです。山藤さんありがとうございました。今後とも宜しくお願い致します。

愛仁会高槻 在宅サービスセンターだより

不安は多いけれど 家族で介護を頑張っておられるEさんご家族

高槻在宅サービスセンター ヘルパーステーション愛仁会高槻 介護福祉士 原本 章代

今回は訪問診療・訪問看護・言語聴覚士・ヘルパーを利用しながら在宅生活を送っておられる90歳代男性Eさんを紹介します。Eさんは昨年、誤嚥性肺炎や脊椎炎などからベッド上での生活となり、今年4月から当在宅サービスセンターよりヘルパーが訪問することになりました。

介護が大変な状態でも、息子さんと娘さんは「自宅で一緒に暮したい！」と希望されました。しかし「どんな生活になるのか…」という不安もいっぱいでした。そこでヘルパーの役割の一つでもある介護の指導を目的に訪問が始まりました。

息子さん達はオムツの当て方等、とても熱心に取り組まれましたが、初めてのことばかりで混乱もありました。一番苦労されたのは便の処理で、オムツ交換の際にシーツが汚れてしまうこともあり、便の状態や量によって使用する物品や、オムツパットの大きさを工夫すること等、説明を交えながらヘルパーと一緒に何度も実践していきました。

4ヶ月経った7月には、最初に要した半分の時間で、上手にオムツ交換が行えるようになり、「自分達で身の回りのことができるようになり感謝している。」というお言葉をいただくことができました。

現在はEさんのヘルパーサービスは終了し、奥さんのサービス時に、息子さん達から相談を受ける等で関わりが続いています。

ヘルパーは、ご家族が望まれる介護が実現するように、介護指導の部分で関わることもできるということを、あらためて考えることができたEさんご家族との出会いでした。

ヘルパーの役割や必要性を十分に発揮して、Eさんを含め、多くの方の支援ができるように頑張っていきたいと思います。